

響が寄せられました。

「妊婦が萎縮せずにマタニティマークを使えるようになってほしい」という願いの一方で、「妊婦以外にもつらい人はいる」という指摘や、流産した方や不妊治療中の方から「マタニティマークを見るのがつらい」という声もありました。

フォーラム面ではこれまで2回、これらの課題について、多様な意見、提案を載せてきました。

この日の意見交換会には、意見を送って下さった方々のほか、福祉の専門職を招きました。

意見交換会ではまず、昨年に2度の流産を経験した女性が思いを語りました。静岡県から来た弁護士で、妊娠中はマークを身につけていました。優先席に座るとき、周囲に事情を理解してもらう「お守り」としてです。

2度目の流産のあとは、妊婦や小さい子ども連れの人を見るのがつらくて仕方なかった。だから、マークを見るのがつらいという気持ちも理解できる。でも「必要性があるのだから、堂々とつけてほしい」といいます。

弁護士として、マタニティハラスメントの相談も数多く受けています。上司から「人手が足りないから今は妊娠するな」と言われるような事例は少なくないそうです。

「自己責任で妊娠したのだから周りに迷惑をかけるな、という圧力の問題と、電車の中で妊婦をどう扱うかの問題はつながっているところがある。職場の状況など社会的な要因によって、妊娠するという選択がしづらい社会であってはならない」

■「行動から変化に期待」

マタニティマークをめぐる課題について、参加者それぞれの解決の取り組みや読者から寄せられた提案をもとに議論が展開されました。

名古屋商科大学大学院の社会人チームは、電車内で席を譲りたい人と近くにいる妊婦とを通信機器で結びつける「マタニティビーコン」について説明しました。発表前なので、まだ中身は公にできないそうです。

チームの一人、佐原英行さんは「まずは妊婦に絞って考えています。一つの行動から優しさが広がり、変わっていくと期待しています」と話します。

一方、武蔵野美術大の菊池彩水（あやな）さんは、妊婦も障害者も誰もが身につけて使える「PLEASE（プリーズ） TAG（タグ）」を作りました。右の耳が聞こえないため、洋服店で店員に右側から話されても聞こえないことがあるという菊池さん。TAGは伝えたいことを自由に書き込めるのが特徴です。

「ビーコンは、助け、ヘルプがほしいときに有効かと。私の場合はヘルプというより周りの少しの気遣いがほしい。両方あっていい」

また、誰もが利用しやすい交通システムの実現を目指して活動する平山世志衣（よしえ）さんは、お金を払って座席を指定することや、女性などに限った専用車両も有効だといいます。「システムとして動くものは、なるべくシステムで解決を」という考えがあるからです。日本の、特に首都圏の交通機関は世界的にも異常な混雑。「座席が必要な乗客には席に座る権利があるという風に、公共交通の事業者には考えてもらえるといい」

これを受け、「人間って、オセロみたいに両面ある」と考える市川貴浩さんが発言。席を譲ってみたことで、「こんなに幸せな気持ちになるんだ」と意識が変わったそうです。

「他者に貢献して、オセロの白い面が向く。そんな気持ちが波及していくような社会になればいい」

「白い面」が向くきっかけとなる体験が大切。そのためには、出会いが必要です。

「配慮が必要な人を専用車両に閉じ込めるというより、インクルージョン（包摂）というか、溶け込ませる方が、社会の持続的変化をもたらすのではないか」（高木由喜さん）

社会福祉士の橋本真佐子さんは、配慮が必要な人を理解する前提となる知識の重要性に触れました。「妊娠後期になってもつわりがある人もいるとか社会に伝えていくべきことを、システムとは分けて議論することも必要かと思う」

■「社会的弱者への視線、きつくなっている」

電車やバスの中の雰囲気は、日本と海外とは違うのでしょうか。

鹿股（かのまた）幸男さんは、1歳の息子をつれた台湾旅行が印象的だったといいます。

「ベビーカーに乗せていたが、みんなに譲ってもらえる文化があった。カナダにいたときも、ワルそうなお兄ちゃんがずっと譲るんですね。文化、習慣の違いを感じた」

市川さんは最近、目の前にお年寄りがいるのに、若い男性が座ったままゲームをしている姿を見かけたといいます。「私はIT企業に勤めているので、『ITの技術が人を幸せにする方向にっていないのか』と気になっている」

橋本さんは、社会全体に余裕がなくなってきていると考えています。「妊婦に対してだけというより、生活保護受給者など社会的な弱者といわれる人々への視線がきつくなってきていると感じる」

小林基道（もとみち）さんは、周りの人への無関心が気になっています。

「みんな携帯を持って耳にイヤホンして音楽を聴いている。要は周りとかかわりたくない、めんどくさいんです。空気でいたい人が多いのだろう」

優先席で何が起きているか気にして見ているという佐原英行さんは、「それほどひどくはない」といいます。

「ほどほど混んでいる電車の場合、優先席が1人だけは座れる状態が維持される。空いていたら座るんだけど、最後の1席には座らない配慮がなされている。世の中の9割5分はうまくいっているんじゃないか」

子どもが泣くと親の肩身が狭くなるように、車内では静かにしないといけない雰囲気もあります。「公共の場で知らない人同士が声を掛け合って、コミュニケーションできない状況を生んでいるのでは」（高木さん）

■譲る文化が定着するには

妊婦ら配慮を求める側がつけるマークだけではなく、「席を譲りますマーク」を作ってはという投稿が多く寄せられました。

鹿股さんと小林さんは去年11月に「お席どうぞ」マークを作りました。名前もあります。「ゆずるくん」です！名刺大の紙で出来ていて、胸ポケットに挟んだりカバンにつけたりしてアピールします。

ふたりとも胸につけて座席に座っているそうですが、ちらちら見られるだけ。「声をかけられる前に席を譲ってしまう」と笑顔の鹿股さん。

「日本人が席を譲らないのはシャイだからだと思う。背中を押すアイデアでもあります」と鹿股さん。普及を望みつつも、「最終的には譲る文化が定着して、マークがいらなくなる」といいな。

法政大経営大学院の池田亮さん（31）も友だちと3人で、「助けますマーク」を考えています。若い人がおもしろがってつけられるマークにと、獺（ぼく）のキャラクターで試作中。夢を食べるといって獺が、困り事を食べるというイメージです。

去年、新宿駅ホームで白い杖をつく男性が戸惑っているのをだれも助けないのを見て、決めました。手を貸そうという人はきっといるはず。一歩踏み出せるマークを作ろうと。

池田さんが昨秋、首都圏の大学生50人に「席を譲るか」を聞くと、30%は「譲る」、16%は「座っていたい」、54%が「譲りたい気持ちはある。でも恥ずかしい、イヤな思いをしたことがある」と答えました。

「困っている人に声をかけようと思う若者は多い。背中を押すお守りに」。ストラップにして、4月からボランティアサークルの大学生につけてもらおうと計画しています。

「BABY in ME」のマタニティマークを1999年に発表したライター村松純子さん（52）は、席を譲りますの目印にハンカチを使ってはと提案します。名付けて「思いやりのハンカチ」。電車に座ったら、かばんなどの上にハンカチを広げて見せます。「手持ちのハンカチで気軽に始められます。譲りたい人と困っている人をハンカチ1枚で結べたらうれしい」

「ゆずるくん」についての問い合わせは、ホームページ (<http://yuzurukun.jp>) からメールで。

「PLEASE TAG」のホームページは (<http://please-tag.com/>)。

■取材後記

「妊婦だと気づいてもらおう」と生まれたマタニティマーク。でも、つけたらつけたで「幸せをアピールしているようだ」と冷ややかな視線も。そんな「どうすればいいの？」という状況で、今回登場した「ゆずるくん」マークは逆転の発想が生きています。譲る側からアピールするんですから。製作した2人にはひそかな夢も。「ゆずるくんを、フィギュアスケートの羽生結弦（ゆづる）くんがつけてくれたらなあ」。深いテーマですが、遊び心も大事だなと思います。（河合真美江）

私がハッとしたのは、この問題がマタハラにつながっているという指摘です。実はいただいた投稿の中には妊婦への心ない言葉が少なくなかった。なぜ妊婦は嫌われるのか。妊婦のくせに主張するなどと言われるのか。妊婦が、ひいては女性の生きづらさが解消されていくことが、遠回りなようで重要な解決策だと思っています。（十河朋子）

◆ほかに井上充昌、前田智、村上研志が担当しました。

出生祝いに「木のおもちゃ」 真庭市、4月から届け出時に贈呈 岡山

産経新聞 2016年2月29日

真庭市は4月1日から、同市在住の新生児の出生届け出時に誕生祝いとして、地元産の木材を使った「木のおもちゃ」を贈呈する。木の香りやぬくもりを五官で感じ、豊かな感性をはぐくんでもらうのが目的。“里山まにわ”からの贈りもの事業として、約132万円を新年度予算に盛り込んだ。

地元産木材の利用拡大とともに、市内の障害者就労施設の事業振興を図ることも狙いで、3施設で年間350セットの作成を見込んでいる。「木のおもちゃ」は動物の引き車に乗った積み木や車のおもちゃなど3種類を用意し、届け出時に1つを選んでもらう。

配布場所は、市役所本庁舎福祉課と各振興局地域振興課。問い合わせは市福祉課（電）0867・42・1581。

障害者施設内に企業 通所者、実践的な就労訓練



岐阜新聞 2016年02月29日

施設に入居するリタテクノの村瀬孝司社長（右）と誘致した菊池利哉会長＝岐阜市東改田、第3光陽

一般社団法人光陽福祉会（岐阜市折立）は、同市東改田に3月1日開所する障害者就労支援施設「第3光陽」に、精密部品加工業リタテクノ（同市奥）を誘致した。同社は施設内に部品製造工程の一部を置き、通所する障害者に製造を委託、就労訓練の場にする。同会の菊池利哉会長は「福祉施設の中に社会空間を設けることで、一般就労に向けた支援を強化したい」と話す。

同施設は、障害者の一般企業への就労を目指した「就労移行支援」と「就労継続支援B型」を行う。B型は就労が困難な障害者を対象としており、非雇用で授産的な作業をすることが多いというが、同施設では実際の企業の生産を請け負うことで、より実践的な訓練に取り組む。

通所する18～55歳の障害者約30人は、同社から発注を受けた水回りのバルブ部品

の洗浄、検査、梱包などの作業を行う。すでに1年間、同社に通って実習を続け、作業工程を学んできた。村瀬孝司社長は「健常者と何ら変わらない作業ができているばかりか、検査ではこちらが気付かないような細かな部分まで目を配ってくれる」と太鼓判を押す。

菊池会長は「勤労や納税の義務を果たし、障害者が自立した生活が送れる支援をしたい」と言う。

施設では障害がある高校生を対象にした放課後などのデイサービスも行い、職業体験に同社から受注した仕事を活用していく。



米沢初の発泡酒 障害者就労施設が醸造

河北新報 2016年2月29日
障害者の自立支援の一環で開発されたウコギの発泡酒（左）とリンゴの発泡酒

山形県米沢市中央2丁目にある障害者就労支援施設のビールパブ「極楽麦酒本舗」が、米沢特産の食材ウコギとリンゴを原料に使った2種類の発泡酒の販売を始めた。米沢初の地発泡酒。施設を運営する極楽麦酒本舗合同会社が開発し、施設に併設した醸造所で造っている。

極楽麦酒本舗は昨年1月、障害者と雇用契約を結び就労継続支援A型事業所として開所した。現在20～

60代の12人が接客や調理の手伝いなどをする。

発泡酒づくりは醸造士で極楽麦酒本舗合同会社専務の中村一郎さん（60）が担う。原料のウコギとリンゴは米沢市を中心に山形県置賜地域から調達。ことし1月に仕込みを始め、今月初旬完成させた。

リンゴの風味を生かした発泡酒は「鎗山城」と名付け、黄褐色で切れがある味わい。ウコギ発泡酒は「五虎退（ごこたい）」といい、黒色でほろ苦さが特徴。ネーミングは米沢ゆかりの山城と日本刀にちなむ。

店内で提供するグラス（200ミリリットル）が380円。3月には瓶（330ミリリットル）も販売する予定で、ラベルデザインは米沢市出身の漫画家ラズウェル細木さんが手掛けた。

中村さんは「事業所の経営安定化を図り、障害者の働きがいにつなげ、自立支援に努めたい」と話した。

極楽麦酒本舗の営業時間は午後5～10時。日、木曜定休。連絡先は0238（40）0291。

ふるさと納税返礼品 墓守代行など実施へ 豊後高田市【大分県】

西日本新聞 2016年02月29日

豊後高田市は3月1日から、市内の空き家や墓の清掃をふるさと納税の返礼品として代行する「ふるさと安心見守りサービス」を始める。

市内の五つの障害者就労支援施設と提携。2万円分の納税者の希望に応じて、施設利用者が空き家の除草や墓の清掃、花立てを代行する。全国で過疎化が進み、空き家の増加や墓の管理が問題になっていることから企画した。市企画情報課は「障害者の社会参加とふるさと納税の利用促進につなげたい」としている。

同課によると、ふるさと納税制度を利用した同様のサービスは、県内では佐伯市に続き2市目。

障害者作製コサージュ胸に卒業 六甲アイランド高 神戸新聞 2016年2月29日

29日にある六甲アイランド高校（神戸市東灘区向洋町中4）の卒業式で、障害者が働く事業所が手掛けたコサージュが、卒業生らの胸元を飾る。「支援になれば」と保護者がNPO法人を通して発注。2月初めに約400個を受け取った。

同校では、毎年卒業生の保護者がコサージュの準備を担当し、業者に頼んだり、手作りしたりしている。



厳しい立場にある働く障害者の現状を報道などで知った保護者（53）が、事業所への注文を提案。障害者の就労を支援するNPO法人「クルーズ」（中央区）が橋渡し役になった。

コサージュを卒業生の胸に飾る保護者＝六甲アイランド高校（神戸市東灘区）

クルーズは青陽東養護学校（灘区）のPTAメンバーで昨年4月に設立。六甲アイランド高校とは、生活福祉コースの生徒が毎年同養護学校の行事にボランティアとして参加しており、コサージュ製作の話がスムーズに進んだ。

製作したのは、東灘区にある「ジンジャークラブほっと」「あすか」「就労支援 つぼみ」の三つの事業所。初めての作業だったが、役割分担して、1カ月ほどで仕上げた。船出を祝福する意味があるシンビジウム2輪に、レースやリボン、パールの玉飾りなどが丁寧にあしらわ

れている。

卒業生保護者代表の高山美代子さん（48）は「満足な仕上がりに感謝しています。今後も私たちにできる方法で力になれば」と話している。（貝原加奈）

高齢者虐待 家庭内1093件...2014年度 読売新聞 2016年02月29日 千葉

県内の家庭内で確認された65歳以上の高齢者に対する虐待件数は2014年度、前年度比12件増の1093件だった。市町村が確認した件数を県がまとめた。虐待を受けた人数は19人減の693人。虐待を指摘する通報は、県警から寄せられた件数が増え、県高齢者福祉課は「社会的関心の高まりに伴って警察への通報の意識が高まり、その結果として県警からの通報が増えたのではないかと分析している。

県のまとめによると、虐待の種類別では、暴力や拘束など「身体的虐待」の被害者が最多の485人で、全体の7割を占めた。次いで罵声を浴びせるなどの「心理的虐待」が331人、「介護などの放棄」が153人などだった。

虐待を受けた人数を5段階の深刻度で分類したところ、包丁で刺されたり、棒でたたかれたりして負傷するなど最も深刻な「5」は62人だった。「4」は39人で、「1」は最多の277人だった。

虐待の事実や疑いを市町村に指摘する通報は、20件増の1146件が寄せられ、通報者で最も多かったのは「介護支援専門員」（ケアマネジャー）の327件（全体の28.5%）。「警察」が249件（同21.7%）で続き、前年の183件から36.0%（66件）増だった。

一方、介護施設の職員が虐待を行ったとする通報件数は、前年度比3件増の40件。虐待を受けた人は19人で、深刻度は「4」が2人、「3」が最多の8人、「5」はいなかった。同課は「悪意ではなく、経験不足によるものが多い」とみており、研修を徹底する方針。

子供を「閉じ込め」「ツッコミでたたいた」障害児施設 大阪市が指定取り消しへ、不正受給も

産経新聞 2016年2月29日

大阪市は29日、入所児童への虐待や給付金の不正受給などが判明したとして、同市大正区の障害児向け学童保育施設「ビックハート」の事業者指定を3月末で取り消すと発表した。

市によると、女性従業員（当時）が平成26年夏～27年夏、児童1人を複数回トイレに閉じ込めた。26年5月ごろ～27年8月には児童・生徒計5人の頭を平手でたたいた。女性役員も26年11～12月、生徒1人の手首をかんだ。虐待を受け、心的外傷後ストレス障害（PTSD）と診断されたケースもある。従業員は「暴れないよう注意したが、聞かなかったのが閉じ込めた」「（漫才の）突っ込みのようなつもりでたたいた」などと市に説明しているという。

またビックハートは、必要な常勤スタッフを配置しなかったり、サービス記録を偽造したりして給付金約770万円を不正に受給した。市は加算額も含め約1070万円の返還を求める。

高知市のDVシェルター運営厳しく ボランティアで10年

高知新聞 2016年02月29日

DVから逃れる人たちが暮らす「シェルター」（高知市内）

ドメスティックバイオレンス（DV）や虐待を受けた人たちに避難シェルターを提供しているボランティア団体「高知あいあいネット」（高知市）の運営が厳しくなっている。2016年で発足10年。1年間に約40組の親子らを受け入れており行政で対応しきれない人の行き場となっている。ただ、費用の多くは中心メンバーが自己負担しており、存続に頭を悩ませている。



年40組保護 費用負担が重荷

あいあいネットは2006年、中心メンバー8人で立ち上げた。高知県内11カ所の民家やアパート計25戸と契約し、これまでに約300組が身を寄せた。

DV被害者のシェルターは高知県も設置している。しかし、保護対象は主に命の危険がある人に限られ、一時保護中は通勤や子どもの通学も制限される。

このため、「生活費を渡してもらえない」「言葉による精神的暴力」などの被害者や、避難中も仕事に通いたい人にとって、民間シェルターが頼みの綱になっている。

夫の暴力から逃れて現在、高知県内のシェルターで暮らす50代の女性も「外出は不安だったけど仕事を休むわけにできなかった」という事情から2015年春、あいあいネットの事務所に駆け込んだ。

夫は10年ほど前から仕事がうまくいかなくなり、暴力を振るうようになった。やがて警察沙汰になるほどにエスカレートしたが、経済的な不安や夫への複雑な思いから別れをためらううち、「諦めて慣れる感覚になっていた」という。家出を決めたのは暴力が子どもにも及び始めたからだった。

着替えを詰めたかばん一つで家を出てから間もなく1年。生活用品や食品の支援もあり、「以前は夫から批判されるうち、自分は一人では生きられないんだと思っていた。今は少しずつ自信が戻ってきました」と言う。

あいあいネットが警察や行政の紹介で受け入れるケースも多く、虐待を受けている子どもを保護者の了解を得た上で預かることもある。収入や心が安定するまで1年前後住む人も多いという。

ただ、家賃などの費用負担は大きい。寄付と会費、高知県の補助金（年約70万円）でまかなっているが、毎年150万円前後の“赤字”。メンバーの持ち出しでやりくりする状

態が続いている。

青木美紀代表は「家賃を低くしてくれたり、部屋の修繕を業者が安くしてくれたり、ボランティアに支えられてやってきたが、このままでは限界。後々まで続く形を考えたい」と話している。

他県でも休止する民間シェルターが増えており、鳥取県は民間シェルターに家賃全額と活動費を補助している。高知県も2016年度、補助の増額を検討している。

「地中海の香り」出張料理に舌鼓 太田の福祉施設

東京新聞 2016年2月29日



シェフの作った料理を味わう利用者ら＝太田市で

ホテルなどのシェフによる出張料理ボランティアが、太田市の障害福祉サービス事業所「かなやま学園」であり、利用者らはプロの味に舌鼓を打った。

同市周辺の結婚式場やホテル、レストランのオーナーやシェフらでつくる全日本司厨（しちゅう）士協会太田支部（長沢和正支部長）が長年続けるボランティアで、三十九回目。今回のメニューは、若鶏のカチャトーラ風煮込みやスペイン風炊き込みご飯など計五

品。隣接する児童発達支援センター「ひまわり学園」と合わせて計百七十食分が振る舞われた。卵や乳製品アレルギーの入所者に別メニューを用意するきめ細やかな配慮もあった。

料理ができあがると、長沢支部長が「心を込めて調理しました。地中海の香りを味わってください」とあいさつ。会場のホールには、この日を心待ちにしていた利用者の笑顔があふれ、あちこちのテーブルから「おいしい」などと声が上がった。（粕川康弘）

堺市：音声でマイナンバーお知らせ…視覚障害者にCD 毎日新聞 2016年2月29日 3月1日から開始

住民一人一人に12桁の番号を割り当てるマイナンバー制度で、堺市は3月1日から、通知カードに記された番号を確認できない視覚障害者に対し、番号の音声を録音したCDを提供するサービスを始める。通知カードに番号の点字表記がないことなどから、視覚障害者の間に「番号が読み取れない」との困惑の声が上がっていた。自治体が番号の音声データを提供する支援策は、全国的にも珍しい。

堺市は、希望する視覚障害者に、番号の音声を録音したCDを渡したうえで、CDのケースにも番号を点字表記したシールを貼り付ける。通知カードや個人番号カードのカバーにも点字シールを貼る。点字が読めない視覚障害者もいるため、点字シールに加え音声データを提供することにした。専門スタッフがいる視覚・聴覚障害者センターで無料で受け付ける。市内の視覚障害者は約2300人。

マイナンバー制度では、視覚障害者向けに通知カード書類の左下に音声コード（約2センチ四方）が印字されているものの、スマートフォンの読み上げアプリなどを使わなければならない、相談や苦情が相次いだ。総務省は、点字シールを配るなどの配慮に努めるよう全国に通知したが、対応は自治体任せになっていた。【木村健二】



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行